

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

歴史記憶の資源化と文化的景観保護： 広東省梅州市における宗族公園の建設を例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008640

歴史記憶の資源化と文化的景観保護

— 広東省梅州市における宗族公園の建設を例に

河合 洋尚
国立民族学博物館

1 はじめに

1990年代以降、広東省梅州市では急速な都市開発が進められている。そのなかで、市政府や開発業者は、高層のビルや公共施設を次々と建てるだけでなく、観光客や投資者にとって魅力のある都市の特色をつくるため、客家文化を資源として活用するようになっている。例えば、市政府や開発業者は、ユネスコの世界文化遺産であり客家のシンボルとして国内外で知られる円形土楼をモデルとし、博物館、体育館、ホテル、マンションなどを次々と建設するようになった。また、台湾やマレーシアで客家の守護神として知られる三山国王に着目し、その廟や周囲環境を再開発するプロジェクトにも着手した。このように、国内外の観光客または海外の客家のまなごしを意識し、彼らがイメージする「故郷」の景観が梅州市で創出されるようになっている。

しかし、このような外部者のまなごしに応じてつくられた景観は、必ずしも地域住民の記憶や生活と密接にかかわるものではない。とりわけ、こうした景観が集中する都市部の梅江区と梅県新城（以下、梅県と称する）では、歴史的に円形土楼は存在せず、また三山国王も「公王」と称されるなど馴染みが薄い。それゆえ、梅県の住民のなかには、「客家らしさ」に溢れるとされる景観は、ニセモノであると主張する人々もいる。なかでも、一部の宗族は、彼らの記憶や生活と密接にかかわる囲籠屋、祖堂、墓などこそがホンモノの「客家文化」であると主張し、宗族が自ら資金を集めて、それらを修築・拡張するようになっている〔河合 2016〕。特に、筆者がフィールドワークをおこなった梅県都市部のX地域では、祖先をめぐる記憶と「しきたり」に基づき、その関連する建造物を修築・保護する動きが顕著にみられる。

本稿は、こうした動きのうち、楊氏宗族による宗族公園の建設に焦点を当てる。楊氏はX地域の有力宗族の一つである。後述のように、X地域の楊氏は、一族の囲籠屋や祠堂をもたないため、宋代に建てられたとされる始祖の墓を特に重視している。とりわけ、1990年代以降、梅県で都市開発が進み、墓が破壊や移転の危機にさらされるようになると、楊氏は、墓を中心とする公園（日本的な感覚では広場に近い）を建設し、始祖の墓とその周囲環境を保護する構想を打ち立てるようになった。そして、21世紀に入ると、



図1 梅州の位置 (筆者作成)

政府から土地を借用し、国内外のネットワークを駆使して一族で資金を集め、祖先の墓をめぐる記憶を守ろうとしてきた。

正統な「歴史」によると、客家はもともと北方にある中原の民であり、唐代末期より戦乱を逃れ、福建省寧化县石壁村（以下、寧化石壁を称す）を經由して南方に移住したといわれる [羅 1992 (1933)]。だが、楊氏は、一族の過去を語る際に、「中原」や「寧化石壁」を強調せず、彼らの祖先にまつわる別の伝承や記憶を重視してきた。本稿は、楊氏宗族が共有する歴史が、いかにモノ（景観）として立ち現れるようになったのか、歴史記憶の資源化という観点から記述することを目的としている。なお、本稿では、現地で正統とみなされる中原起源の移住物語を「歴史」と呼び、他方、民間で継承されてきた一族の過去にまつわるストーリーを記憶と定義する。ただし、民間の記憶は、実際には「歴史」の影響を全く受けないわけではない。それゆえ、後者については、正統な「歴史」との相互影響を考慮し、歴史記憶という表現を主に用いることにする。

2 楊氏宗族と墓の伝説

2.1 楊氏宗族とその系譜

本稿の研究対象である梅州市は、広東省東北部の山岳地帯に位置しており、福建省や江西省と隣接している (図1)。住民の約98%が客家というエスニック集団で占められ、

世界各地に多数の客家華僑を送り出していることから、「客家の故郷」として知られている。現在、梅州市は、2区（梅江、梅県）、5県（蕉嶺、平遥、五華、大埔、豊順）、1市（興寧）を管轄しており¹⁾、X地域はそのうち都市部に位置している。

X地域は、宗族が密集する地域の一つであり、30を超える大小の宗族が割拠している。そのうち、楊姓を名乗る宗族は2つある。1つは関西堂の楊氏であり、もう1つは紹徳堂の楊氏である。両者は、X地域に居住する同じ楊氏であるが、系統の異なる別の宗族であるとみなされている。現地では、前者は「老楊」と呼ばれており、早くも宋代に移住してきた。他方で、後者は「新楊」と呼ばれており、もともとは林姓であったのが、後に楊姓を名乗るようになったのだという。林姓から楊姓に改名した理由については定かではないが、王朝時代に政府に逆らって大量に虐殺され、身分を隠すために楊姓に改名したのだと語る者もいる。数ある中国の姓のなかで楊姓に改名した理由は、「林」のうち「木」を1つ残し、容「易」に変えたことを表すためであったと言い伝えられている。族譜の記載によると、紹徳堂の始祖は、1368年に寧化県石壁から梅県に移住した。

本稿は、X地域の2つの楊氏のうち、「老楊」に焦点を当てる（以下、「老楊」を単に楊氏と記し、「新楊」を紹徳堂の楊氏と特記する）。『楊氏族譜』によると、楊氏のルーツは黄帝にまで遡ることができる。そして、黄帝の子孫である楊杼が楊氏一族の始祖とされる。その後、58世・楊承休が杭州へ、63世・楊輅が江西省の廬陵（今日の吉安県）へと移住し、その子である64世・楊雲岫が梅州に行き、梅州始祖となった。

楊雲岫は、唐の中和元年辛丑（881年）に生まれ、進士を賜り、潮陽の太守となり、宋の太祖より朝議大夫に勅封された。その後、江西省から梅州に来て、梅県の水南（梅江の南側）にある楊古状に住んだ。北宋の乾徳元年（963年）に亡くなり、遺体は福建省武平の南岩に埋葬されたが、楊雲岫の友人であった宋朝の護国大師・定光古佛が梅城のX地域に風水宝地を見つけ、ここに埋葬し直したのだという。

紹徳堂の楊氏と異なり、この楊氏一族は、戦乱から逃れるため中原から南下し、寧化石壁を通過して梅州市に移住するという、客家の典型的なルートを歩んでいない。楊雲岫とその父・楊輅が南方に移住したのは、彼らが官僚であり、官職に就くためであった。よく知られているように、王朝時代の官僚制度では、本籍とその周辺地域で官職に就くことが許されなかったため、他省に行かざるを得なかった²⁾。換言すれば、楊氏の祖先は、官職のために他省から移住してきた外省人、すなわち菊池〔1998〕の言うところの「客籍エリート」をルーツとしている。

梅州始祖である楊雲岫には、思孝、思恭、思聡という3名の男子がいた。長男の思孝は進士、次男の思恭は郷貢、三男の思聡は及第欽賜状元となり、それ以降、楊氏は9名の進士を輩出した。また、思孝公、思恭公、思聡公の系譜の子孫は、梅州市にとどまらず、中国南部各地、さらには海外にまで移住している。

図2は、そのうち思孝公と思聡公の系譜の一部を、『楊氏簡譜』を参照して作成したも

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

図2 楊雲岫の系譜（部分） 出典：「楊氏簡譜」を参照して筆者作成

のである。梅州始祖である雲岫公を第1世とすると、思孝公の第22代子孫・洵公が蕉嶺県に移住し、その後、28世子孫・干崇公が台湾南部の美濃に移住した³⁾。他方で、思聡公の系譜からは、梅州市の管轄にある豊順だけでなく、同じ広東省の普寧、惠州、さらには雲南省や金門島にも移住していることが分かるであろう。各地に移住した一族の子

孫はそれぞれ「房」を形成し、各地で子孫を増やしていった。そのなかには、インドネシア、マレーシア、シンガポール、タイ、インド、モーリシャスに移住した子孫、もしくはアメリカ、カナダ、ニュージーランド、日本に留学・移住した子孫もいる。

2.2 祖堂、墓、及び墓をめぐる歴史記憶

X地域のいくつかの宗族は、一族が集まる結節点として、祖先の位牌を祀る祖堂を有している。例えば、X地域の張氏宗族には始祖が約400年前に開設した囲籠屋があり、春節など主催の日には各地から一族の成員が集まり、囲籠屋内部の祖堂で祖先を参拝する。しかし、X地域では楊氏宗族の祖堂は存在しない。言い伝えによると、南宋の紹興年代、雲岫公の7代・8代子孫が老城区の道前街に祖堂を建設したが、中華人民共和国の成立後に取り壊された。それゆえ、楊氏宗族の間では、世代深度が比較的低い「房」の祖堂が分散しており、それぞれの「房」の祖先を各自参拝している。「房」の大多数は、梅県の郊外や他の県・市・省に分布している。そのうち、県内、県外、市外、省外の「房」の祠堂を便宜的に選んでみていくことにしよう。

(ア) 梅江区西陽鎮の祖堂：雲岫公の23世子孫である林貴公が約400年前に梅城の江南に祖堂を建てたが、2008年に政府が梅江岸に帰読公園を建設したため、2011年に祖堂を郊外の西陽鎮に移した。林貴公から現在まで18代続いており、一部の成員はさらに四川省、新疆ウイグル自治区、香港、タイなどに移住した。

(イ) 豊順県湯西鎮の祖堂：雲岫公の23世子孫である文格公が明の洪武元年(1368)に五華県から移住し建設した。現在、この祖堂がある村落には「房」の成員が約2,000人居住しており、そこから広東省の各地、さらに香港、台湾、シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイなどに移住した。図2の系譜にみるように、豊順県は、他にも楊氏のいくつかの系統の成員が居住している。

(ウ) 普寧市軍阜鎮の祖堂：雲岫公の20世子孫である庸道公が豊順県より移住し、祖堂



図3 梅州市地図 (著者作成)

を建設した（図2を参照）。

（エ）広西チワン族自治区梧州市藤県濠江鎮の祖堂：雲岫公の27世子孫にあたる自秀公が、約400年前に広東省の連州を經由して藤県に移り、祖堂を建設した。現在、藤県には4,000人余りの成員がおり、さらに2,000人余りが平南県に移住した。一族の成員は、広西各地に分布している。

これらに代表されるように、楊氏の一族は数百年前に各地に移住し、「房」を形成して祖堂を建てた。ただし、ルーツとされるX地域では祠堂がなくなっているため、楊氏の成員は世代深度が比較的浅い各地の「房」の祠堂の祖先を参拝するのみで、必ずしも雲岫公を参拝するわけではない。ましてや、各地に住む楊氏の成員は、県や省、さらには国を超えて住むこともあるため、高いに面識があるとも限らなかった。むしろ中国国内外に住む大半の楊氏は、共通の系譜を辿ることはできても、相互に連絡をとり合うことがなかったのである。

こうした状況のなか、X地域の楊氏宗族は、雲岫公の墓を守り、参拝することに力を注いできた。上述の通り、雲岫公は936年に亡くなり、彼の友人である定光古佛によりX地域に埋葬された。つまり、雲岫公の墓は1,000年以上も前に建てられたことになる。この墓は、写真1にみるように、亀甲墓のような形をしており、雲岫公とその妻である歐陽夫人が埋葬されている。

また、雲岫公の墓の隣には、定光古佛の指を埋葬した墓が並んでいる。定光古佛は、姓を鄭といい、福建省泉州市同安出身の实在の人物であったとされる。宋の太祖が「護国定光古佛」と名づけたと言い伝えられ、福建省西部には定光古佛をめぐる信仰が広く分布している。楊氏の間での伝承によると、定光古佛は、雲岫公の徳の高さにひかれ、彼の死後に水や山で囲まれた風景がきれいなX地域に埋葬し、墓を立てた。同時に、定光古佛は自身の左手中指の爪を埋葬し、始祖の墓と並べ友情を示したといわれる。楊氏宗



写真1 始祖・雲岫公の墓（左）と定光古佛の玉甲墓（右）
（2016年8月、筆者撮影）。

族は、雲岫公の墓と定光古佛の爪を埋葬した墓（玉甲墓）が並ぶこの地を、「天虹灌水の風水宝地」と言い表している。そして、楊氏は、一族から数多くの科挙合格者を輩出し、さらに現在でも行政、軍事、学術、商業などの世界で成功した子孫が複数いるのは、この風水の恩恵のおかげだと考えている。こうした墓をめぐる祖先と風水の語りは、特にX地域に住む楊氏が日常の対話を通して共有する、集合的記憶となっている。

3 宗族公園の建設と客家言説

3.1 公園化計画の推進

楊氏宗族は、梅州始祖である雲岫公と定光古佛の墓を重視し、改革開放政策が実施されてから墓を修築し、その周囲環境を整備してきた。特に、1986年には、香港に住む恵陽県出身のA氏が父親の言いつけを守り梅県までルーツ探しに来て、始祖である雲岫公の墓に辿り着いた。その後、A氏とその兄弟は、多額の寄付をし、雲岫公と定光古佛の墓を修築した。また、1987年11月には梅県人民政府文件「第一、第二批重点文物保护单位的通知」により、この2つの墓が県の重点文物保护单位（文化財）に登録された。さらに、1999年6月には梅江区の重点文物保护单位として登録され、区の文化局局长が文化財登録の記念式典にて、これらを「優れた歴史文化遺産」として保護・管理することを宣言した。それにより、この2つの墓は、都市部にあるにもかかわらず、移転や破壊の危機を免れることができたのである。

しかしながら、1990年代より梅城の都市開発が加速するようになると、楊氏宗族は彼らの墓の風水が壊されることに危機感を抱くようになった。文化財保護法で守られているのは墓であり、墓の周囲環境は常に開発の危機にさらされていたからである。楊氏が内部発行している『簡報』の創刊号（2002年8月刊行）では、始祖の墓が破壊される危機感について、以下のように記述されている。

「最近の情報によると、梅城の建設が飛躍的に進んだため、雲岫公の墓付近では大規模な道路の工事がおこなわれるという。これは墓前の池の向かい側にある小鉄道跡を18メートルの街道にして城の北側の環状線とするものである。小鉄道は池の岸辺にあり、道路の拡張に伴って池の一部が使われ、さらには池そのものが商業用地となってしまう可能性もある。もしそうならば古墓の全体的な形象に影響を与え、『天虹灌水』の風水宝地を壊してしまう。歴史的な原因により、この池の所有権は付近の村政府に渡っており、資金を集めて池を買い戻すことが急務となっている。千年も続いた雲岫公の墓の全体を守ることは、私たち子孫が自分たちで行わねばならない責任であり義務となっている」。

この文章にあるように、楊氏が危惧するようになったのは、都市開発により墓の前の池がなくなり、祖先から受け継がれてきた好風水が破壊されることである。風水とは、

環境の良し悪しが人間の命運を左右するとする思想で、特に中国では墓とその環境がその子孫に多大な影響を与えるとみなされている〔渡邊 1990, 2001; 聶・韓・曾・西澤 (編) 2000ほか〕。楊氏もその例外ではなく、墓の周囲の環境が破壊されることは、彼ら一族に災いをもたらすことを意味していた。また、X地域では、水は財を意味すると考えられているため、池を埋め立てて墓の前に建物が並びでもしたら、彼ら一族の繁栄が失われてしまうと考えたのである。それゆえ、楊氏にとって、資金を集めて池を買い戻し、祖先代々受け継がれてきた墓とその風水を守ることは急務であった。そこで楊氏のリーダーたちが発案したのは、池を買い戻すだけでなく、墓地や池の周辺の土地も買い取り、宗族を記念する公園（以下、宗族公園と称する）として建設するということであった。

公園化計画を進めるにあたり、楊氏の成員は、まず、2000年8月29日に雲岫公基金会準備委員会の第一次委員会を開催し、宗族公園の建設構想を提示した。さらに、2002年3月26日、所属する鎮や梅江区など関連する部門の指示を得て「關於申請建造雲岫公園的立項報告」を梅州市人民政府に送り、7月中旬に市政府がそれを受理した。続いて2003年9月に市政府が発布した『梅州市城区近期建設規劃（2003-2005年）』において、民間の資本により公園建設をする許可を得ることができ、同年12月に墓の周囲の土地を取用する許可書を取得した。そして、2005年10月に、楊氏の基金会は「企業法人營業ライセンス」を取得し、実業有限公司として物業管理と園林緑化を進めるという名目のもと、公園建設の計画を進めることが公に認められたのである。

こうした土地を転用⁴⁾する過程において、楊氏の有力者たち（以下、宗族エリートと称する）の役割を無視することはできない。宗族は、民間の父系親族集団であるが、楊氏のような規模が大きい宗族ともなると、内部にはさまざまな成員が存在する。楊氏の子孫には、全国政協副主席であるB氏をはじめ、政府や軍に顔の利く成員もいる。公園化計画の進む2003年7月、理事長に選ばれたC氏も地元の元高校教師であり、梅州市の市政協常委・副秘書長になった人物でもあった。瀬川昌久が指摘するように、宗族は必ずしも私的（家内）領域に押し込まれる親族集団にとどまることなく、私的領域と公的領域の橋渡しをする存在にもなりうる〔瀬川 2016: 297-299〕。楊氏宗族もまさしく、宗族エリートが民間と政府の橋渡しをすることにより、土地の使用権を獲得し、公園建設の計画を現実へと転換する役割を担ってきた。

公園建設の動きは、おおまかに2つの時期に分けることができる。前半期は、公園建設の動きが本格化した2002年から2008年であり、主に準備期にあたる。それに対して後半期は、実際に池とその周囲の土地を買い取り公園の景観を建設していった2009年以降であり、建設期にあたる。そのうち準備期において、楊氏宗族が主に着手した仕事は、資金集め、及び族譜の再編纂であった。

まず、資金集めにおいて、楊氏は、地元の梅県だけでなく、国内外に住む一族の成員

に公園建設の計画を広く周知し、寄付を募った。その主要なメディアの一つが、先述した『簡報』である。X地域の楊氏の呼びかけに応じ、梅県から他の県・市・省に住む多くの成員が公園建設のための寄付をした。とりわけ初期の段階で大きな役割を果たしたのが、香港や東南アジアなど世界各地に住む華僑であった。

準備期における華僑への依存は、企業法人としての組織構成にも顕著に現れていた。理事長には前述のA氏がおさまり、副理事と理事21名は、A氏の妹であるD氏のほか、アメリカ、タイ、マレーシア、シンガポール、モーリシャス、台湾在住の成員が計8名着任している。もっとも彼ら海外在住の成員が梅県で実際の任務をこなすには限界があるだろうが、海外に住む有力な成員を重役につけることで、より広いネットワークを期待していることをみてとることができる。

実際に、上述の10名の成員は、多額の寄付をしている。特に、香港在住のA氏は、準備期においても最も多くの寄付をした。例えば、2004年5月、A氏の一行がX地域を訪れ寄付をした他、翌年の5月にはD氏が来て130万円を寄付した。続いて2007年秋にD氏が祖先祭祀をやってきて寄付金が不足していることを知った後、A氏に報告し、さらに170万余元を寄付した。2009年8月刊行の『簡報』第8期には個人の寄付金リストが掲載されているが、それを見ると1万元以上寄付した成員が24名おり、そのうち先の海外理事は全て含まれている。なかでも、A氏の寄付は計306万4,844元に達している。その次に多くの寄付をしたアメリカ在住のE氏の寄付額が9万9,000元であることを考えると、A氏の金銭面での貢献がどれだけ群を抜いていたかが分かる。

他方で、楊氏は、21世紀に入ると族譜の再編纂を始め、広東梅州楊氏簡史編輯委員会を結成した。そして、600余りの雲岫公の子孫の開基祖を調べ、2006年に『楊氏簡史』第1巻を、2009年に『楊氏簡史』第2巻を刊行した。さらに、2011年には『楊氏簡譜—雲岫公世系贈訂本』を刊行し、その副題の通り、雲岫公につながる楊姓の系譜をこの族譜に掲載した。

この時期に楊氏が族譜を編纂した目的の一つは、各地に住む雲岫公の子孫が始祖の墓の位置を知り、ルーツ探しをする便宜を図るためでもあった。つまり、公園建設計画の一環として族譜が再編纂されたという側面をもつ。ただし、族譜の中身を見ると、楊姓の著名人が広く掲載してあり、なかには雲岫公との系譜が明確に示されていない人物もいる。例えば、『楊氏簡譜—雲岫公世系贈訂本』には、隋の創始者である楊堅、中華人民共和国第四期国家主席である楊尚昆などの写真と氏名が掲載されているが、彼らと雲岫公との血縁関係は必ずしも明確ではない⁵⁾。他方で、楊氏は、公園建設時に、宋代に儂智高の乱を迎え撃った楊宜娘の墓との関連性を指摘することもあった⁶⁾。だが、彼らは宋の真宗年間(1010年)に山西省太原で生まれた楊氏であり、雲岫公との系譜的關係は同様に明らかでない。つまり、楊氏の著名人が広く包括される系譜づくりになっていたといえよう。しかし、人々はこうした作成された族譜に基づいてルーツ探しをする。

それにより今まで名前も顔も知らなかった楊姓の人々が、墓を基点としてつながっていく基盤を形成されていくことになったのである。

3.2 客家言説の領有と景観建設

このように楊氏が公園建設をしようとする動機は、始祖の墓をめぐる好風水を守ることにあつた。しかし、社会主義国家である中国では、風水は「迷信」とであると公的にみなされておられ、それ自体を公園建設の表向きの目的として掲げることはできない。また、公園建設において行政側の理解を得るためには、現行の政策と足並みを揃える必要がある。したがって、楊氏は、中華伝統文化の高揚、和諧社会の建設、文化遺産の保護といった政治言説に則り公園建設を進めていくことになるが、なかでも注目に値するのは客家文化にまつわる言説を領有してきたことである。

冒頭で述べたように、梅県では、1990年代より客家文化を資源として都市空間の特色をつくりだす政策が着手されてきた。特に2003年4月、市政府が、「4つの梅州」政策を打ち出し、「開放梅州、工業梅州、生態梅州、文化梅州」のスローガンを掲げると、客家文化は、同市の文化政策の根幹に据えられることとなった。こうした時勢のもと、楊氏は、この機に乗じて「民間の側から」客家文化政策に貢献し、「客家らしい」特色ある空間づくりをなす事業の一環として公園建設を位置づける姿勢をみせるようになったのである。このことについて、『簡報』第2期では次のように述べられている。

「目下、梅州は開放梅州、工業梅州、生態梅州、文化梅州の『四大戦略』を施行し、同時に商業や投資を誘致しやすい政策や法律を制定した。我々もこの大きなチャンスをつかみとり、一致団結し、『天虹灌水』の宗族公園を一日も早く造るよう引き続き努力しなければならない。時機を逸することはできない。祖先にも後世にも恥じないために、雲岫の子孫が尽力し、各自の力を捧げるように祈っている」。

『簡報』第2期が刊行されたのは2003年8月のことである。執筆・印刷の時間を考えると、「文化梅州」の政策が提示された直後に、この文章が書かれているといえる。楊氏が常に市の政策的動向に目を光らせ、時流に乗った対応をしていたことが分かる。続いて、楊氏の成員は、その5年後の2008年9月28日に、公園建設をめぐるシンポジウムを市内のホテルで開催した。宗族エリートの主導で開催されたこのシンポジウムには、梅州市にとどまらず深圳市、惠州市、韶関市、東源県、連平県、普寧市、陸豊県、揭西県など広東省の各地から100名近くの成員が集まり、公園建設の過去・現在・未来について話し合われた。そのなかで、楊氏の成員たちは、「中華楊氏の愛国主義伝統論綱」を発布し、中華伝統文化の高揚という大義のもと時流に合わせ、伝統を刷新し、継承していく認識を共有したのであった。

こうした政治言説を大義名分とし、楊氏は、2010年から公園内の景観を次々と建設し

ていくことになる。楊氏の高齢者によれば、公園化計画に着手する前、楊氏の墓とその環境はとても質素であり、墓の後ろも盛り上がりはなかった。それゆえ、公園化計画を開始した準備期には、まず墓の環境整備を整えることから始めた。具体的には、墓の後方を盛り上げ、木を植え、墓の周囲を少しずつ美化し、来訪者のために駐車場を整備した。また、国内外の一族より資金を集め、墓の周囲の土地を買い取っていき、2008年には池とその周囲の土地を買い取った。そのうえで、翌年の2009年より徐々に公園内の建造物を立てていく建設期に入った。

建設期に入り、実際に宗族公園が建てられていくと、始祖と池の周囲の景観が大きく変化していくことになる。写真3は、2004年9月とその10年後に撮影した池の周囲の環境である。

2004年9月の時点では、背丈の低いコンクリート造りやレンガ造りの住宅が並んでいるが、公園建設が進められるにつれ、これらの住宅のほとんど取り壊された。そして、建設期に入ると、最も背丈の高い6階立てのビルが宗族の集会所（宗族大樓）として建てられ、その左側に状元亭、右側に將軍亭が建てられた。これらの建築物は、池の手前にある始祖および定光古佛の墓とともに、宗族公園の主要な要素となった。

興味深いのは、『簡報』や現地での聞き取りによると、もともと楊氏が思い描いて公園



写真2 雲岫公の周囲。墓の後方が盛り上がっている（2008年9月、筆者撮影）。

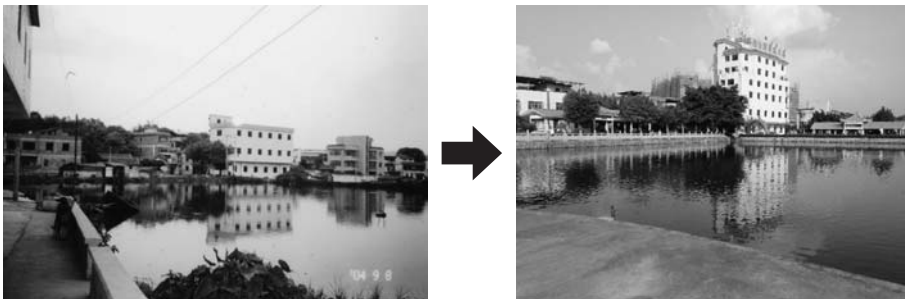


写真3 宗族公園の景観（左は2004年9月、右は2014年9月、筆者撮影）。

の景観と、2016年8月の時点で実際に建設されている公園の景観が一致していないということである。もともと楊氏の成員は、始祖と定光古佛の他、瞻仰亭、状元亭、四知亭、富貴亭、福寿亭という5つの亭を建設することを構想していた。そのうち、瞻仰亭は早い時期に一族の退職幹部であるE氏により提起され、E氏はそのために資金を1,000元寄付したが、結局は頓挫した。他方で、状元亭、四知亭、富貴亭、福寿亭の4つの亭を建設する構想は、先述の楊氏一族による上述のシンポジウムで提起されたが、そのうち四知亭、富貴亭、福寿亭はまだ建設されていない。2016年時点、公園内で新たに変更・建設されたモニュメントは、状元亭、將軍亭、及び定光古佛の墓の碑文の3つである。もともと宗族側が構想していた公園の景観は、政治色が薄く、祖先を懐かしみ、一族の結束力を高め、運気を向上させることに主眼が置かれていた。しかし、実際に建設されている景観は、元来の構想と比べ、より客家イデオロギー、国家イデオロギーが強く反映されたものとなっている。次に、定光古佛の墓の碑文、状元亭、將軍亭の3つが、いかに客家文化の言説と結びつけられているのかについてみていくとしよう。

(A) 定光古佛の玉甲墓の碑文

1999年6月24日に区の重点文物保护单位に指定された時、定光古佛の墓の横に碑文が立てられていたが、この石碑には、客家という文字はなく、主に定光古佛の来歴が簡単に書かれていただけであった。だが、公園建設にともない、2014年3月29日付で新たに碑文が立てられると、定光古佛が「広東、江西、広西、福建、台湾では等しく『客家の守護神』として崇められている」という一文が新たに記載されるようになった。筆者は準備期の間、定光古佛が「客家神」であるという言説を楊氏の成員から一度も聞いたことがなかった。では、なぜ建設期に入り、定光古佛が客家言説と結びつけられるようになったのであろうか。このことは梅州市の外部、特に隣接する龍岩市における近年の動

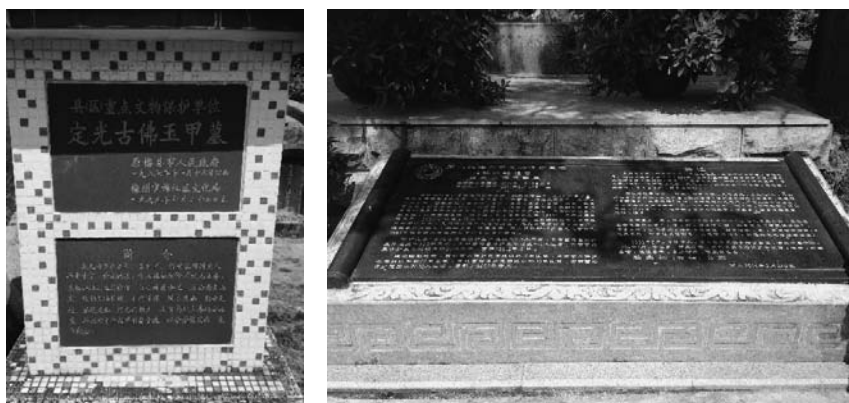


写真4 定光古佛玉甲墓の碑文（左は古い碑文、右は新しい碑文）（2015年8月、筆者撮影）。



写真5 台湾淡水の鄞山寺（2016年9月，筆者撮影）。

向と関連していると推測される。

近年、龍岩市では、定光古佛を「客家神」とする言説が流布されるようになり、関連の景観が観光地として開発され始めている。例えば、定光古佛の出身地である武平県にある獅岩や梁野山が定光古佛と関係する宗教聖地として観光化され、2007年より定光古佛信仰の聖地である清流県の霊台山が客家祖山文化園として開発されるという動きがみられる。邱立漢 [2015: 75] によると、中国大陸で定光古佛を祀る寺院は数百軒あり、その大半は福建省に集中しているが、広東省の陸豊県、汕尾市、樂昌市や、四川省の広安市にも定光古佛を祀る寺院がある。さらに、台湾の彰化県（定光佛廟）と台北淡水（鄞山寺）でも定光古佛を祀る寺院がある。これらは、いずれも汀州府の客家が台湾に移住した後、汀州会館の守護神として祀ったものである⁷⁾。

ちなみに、碑文だけでなく、2012年刊行の『簡報』第12期でも「定光古佛—客家の保護神」という見出しの記事が掲載されており、定光古佛が客家地域で多くの善行をなし住民を助けてきたことが、一族に宣伝されるようになっている。この記事では、宋代の有名な詩人である蘇東坡が定光古佛を称賛したという文章も掲載されている。

(B) 状元亭

前述のように、状元亭は、2008年9月の楊氏シンポジウムで建設が提起され、2010年秋に建立した。ただし、一族の者によれば、もともと彼らが優先的に建設しようとしたのは九龍風水球であったが、頓挫した。その資金をもって、状元亭を建設することになった。

状元とは科挙合格者の最高学位を指す。上述のように、雲岫公の子である思聰公が状元になった他、一族から9名の進士を輩出した。状元亭の石碑によると、唐代以降の2名の状元（楊思聰・楊慎）と99名の進士がおり、歴代王朝の重臣となってきたという。



写真6 狀元亭 (2015年8月, 筆者撮影)。

この亭では、写真6にみるように、狀元や進士になった楊氏の子孫を、文字や写真など視覚を通して紹介するようになっている。

狀元亭の寄付者は、全員が大学卒業以上の学歴をもつ者である。この建造物への寄付金は年齢だけでなく、姓氏を問わず集めている。狀元亭の寄付者一覧をみると、楊氏だけでなく、他姓の寄付者もいくつか刻まれている。また、碑文には、中華の振興のための努力の成果であることが書かれており、愛国主義イデオロギーと歩調をあわせて建設したことがうかがえる。梅県における客家博物館の建設や孔子廟の建設にみるように、客家は教育を重視しており、科挙に多くの合格者を輩出したエスニック集団であると表象される傾向にある。狀元亭の建設は、こうした客家イデオロギーとも歩調を合わせたものであるといえるだろう。

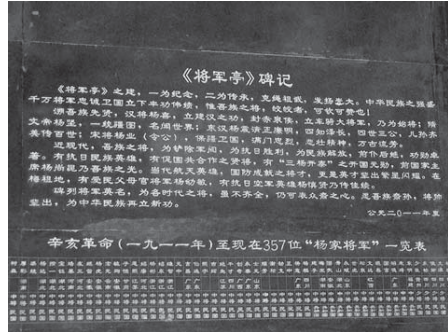
(C) 將軍亭

楊氏の公園建設において將軍亭の建設は当初の計画になかった。將軍亭をする構想を筆者は耳にしたことがなかったし、『簡報』にも記載されていない。しかし、宗族の計画とは裏腹に、四知亭、富貴亭、福寿亭よりも先に建設されたのは將軍亭であった。写真3の右の写真でみると、中央のビル（宗族大樓）の左側に狀元亭があるのに対し、ビルの右側にあるのが將軍亭である。写真3や写真6、写真7からも分かるように、將軍亭の外観は狀元亭と大きく変わらない。中国で活躍した楊姓の將軍の氏名が刻まれており、楊氏が中国の建国や治安維持に貢献してきたことが、視覚的に示されるようになっている。將軍亭は、狀元亭より少し遅い2011年夏に建立された。

將軍亭に刻まれている氏名をみると、漢の將軍・楊喜、隋の建国者・楊堅（文帝）から現在の元国家主席・楊尚昆まで挙げられており、その他、辛亥革命以降に活躍した357名の楊家の將軍の氏名が刻まれている。そのなかには、抗日戦争で活躍した將軍も記載されている。將軍亭は、雲岫公を起点する系譜を重視するというよりは、むしろ広い意味での楊氏が国家に貢献してきたことを示す、愛国主義イデオロギーの強い建造物とな



写真7 狀元亭 (2016年8月, 筆者撮影)。



っている。

また、市内の客家公園には、梅州市の歴代の将軍を展示した将軍記念館があり、愛国心の強い客家のパーソナリティを示す建造物となっている。楊氏の將軍亭もまた、将軍記念館も愛国心を鼓舞する記念碑であると同時に、国のために殉死した英雄を記念するものとなっている。台湾の義民廟にみるように、中華王朝を守るために戦い殉死していった「義民」のイメージは、近年の客家文化を代表するものになっている。愛国心ゆえに殉死していった「一族の成員」を記念することは、同時に、客家らしい特色をもる景観を建設する政策的動きとも一致している。

このように公園建設の過程においては、ただ墓の風水を守るだけでなく、行政側の言説を領有することで、客家文化の特色に溢れた景観をつくりあげている。換言すれば、「草の根」より、政府の推進する都市空間開発を支持するように見せかけることで、祖先から続いてきた風水を守ろうとしてきたといえる。

実際、公園建設が進むにつれ、梅江区委の役人や市長を始め、現地の高官が次々と公園建設予定地を視察するようになっており、建設内容についても指示を受けている。楊氏の成員からすれば、墓を中心とする公園化計画を順調に進めるためには、「政策向けの」景観をつくりあげる必要があった。そうしたなかで、政府に勤務する一族の成員もまた、こうした景観をつくるためのアドバイスをなすことがあった。例えば、梅州市発展戦略顧問であるF氏(雲岫公36代子孫)は、公園建設が客家ブランドを向上させようとする政策的時流に適ったものであり、公園を文化観光特色区とし、客家文化の特色を備えた景観として前面に押し出すよう提起していたことは特筆に値する。このように、宗族のなかで政治的な影響力をもつ成員が、公園の景観を客家文化と結び付け、行政の空間政策と歩調を合させる力学をみてとることができる。

4 秋祭りにみる実践知と「親族」ネットワーク

4.1 祖先崇拝とその実践知

楊氏の成員は、客家文化としての特色を備える景観を建設した一方で、祖先から伝わる墓への参拝活動を継続している。前述の通り、梅州始祖である雲岫公を祀る祖堂はすでに存在していないものの、各地に子孫の「分祠」がある。楊氏の子孫は、春節、元宵節、端午節、中元節などになると、各々の祖堂で「房」の祖先を参拝する。他方で、春祭りや秋祭りになると、雲岫公の墓で祖先崇拝の行事がおこなわれる。また、旧暦1月6日は定光古佛の誕生日であるため、その玉甲墓で参拝する。毎年5月にも碧峰寺の和尚を招いて定光古佛の墓前で念仏を唱えてもらう。

宗族公園において最も盛大な祖先崇拝活動をするのは秋祭りである。秋祭りは、旧暦の8月に開催される。旧暦8月1日になると墓の参拝を始め、この月は日を選ばずに参拝してもいいと考えられている[梅州市地方誌編委弁公室 1992: 62]。秋祭りの時期、梅州市だけでなく広東省や中国南部の各地、さらには海外に住む子孫が次々と来訪し、「房」ごとに参拝をおこなう。それゆえ、旧暦8月は毎日のように参拝者で賑わう。X地域の宗親会は、次々と訪れる一族の成員をもてなし、儀礼のやり方などを主導する。

筆者は、2006、2008、2009、2014、2016年の秋祭りに5度参加したことがある。その変遷を観察すると、後述するようにいくつかの変化がみられるものの、祖先崇拝をめぐる基本的な「しきたり」は守られている。秋祭りの開催においては、客家の伝統文化であるという説明がなされたり、政治言説を引用して正当化したりしている。例えば、客家という文字を会場に掲げた年もあれば、墓の後方のアーチに「共建社会和諧」というスローガンを掲げた年もある(写真2を参照)。また、2008年以降は、会場入り口の受付に、広州の新聞の記事を引用し、以下のような貼り紙をしている。

中国共産党中央弁公庁によると、国務院弁公庁が2006年9月13日に公布した『国家「十一五」時期文化発展規劃綱要』は、濃厚な民族的特色をもつ民間の伝統行事、風習、礼俗を改変・発展させ、民族文化の基本的要素を守ることを強調している。その要素とは、中華民族の始祖の儀礼活動を継続・完成させること、春節、元宵節、清明節などの伝統民族行事の作用を十分に発揮させること、「五一」国際メーデーなどの重要な祭日・記念日を広く宣伝することである。出典：『羊城晚報』2006年9月14日報道。(※太字は原文のまま)

このようにして、楊氏の成員は、秋祭りが「迷信」活動ではなく、あくまで中華民族の伝統を高揚させる活動であるということで、政治的な正しさを主張している。さらに、客家文化の特色をもつ公園景観のなかで、客家の伝統儀礼をおこなうという大義名分を提示することで、この公園が文化的にも「活きた」景観であることを見せてきたのである。

こうして秋祭りは、表面的には客家空間の特色を創る政策と足並みを合わせるように

なっているが、実際の活動をみると、祖先から伝えられてきた墓をめぐる歴史記憶が重視されており、それ準じた参拝がおこなわれる。一族の高齢者によると、こうした祖先崇拜をめぐる「しきたり」は民国期から変わっていないという。また、筆者が2004年から観察した限りでは、後述の通りいくつかの変化は認められるが、墓をめぐる歴史記憶とその参拝をめぐる「しきたり」は遵守されている。では、秋祭りにおける祖先崇拜の具体的な活動について、公園建設直後である2014年の例をみてみることによう。

まず、秋祭りは、先述のように旧暦8月1日から始まる。ただし、実際には前夜である旧暦7月31日の夕刻からX地域の成員が線香をともして参拝を始める。この最初の参拝を「焼頭香^{ヒョウテウショウ}」という。そして、「焼頭香」が終わると、その後の約1ヶ月間、一族の成員が各地から車や飛行機に乗って集まってくる。2014年の場合、最も参拝者が多かったのは12日と13日であった。各々の「房」は、異なる日時に訪問してくるので、祖先への参拝は1度に統一することなく、かわるがわるおこなう。ただし、基本的な参拝の手順は、X地域の楊氏が主導することもあり、ほぼ一致している。豊順県から来た「房」が8月13日に参拝した祖先崇拜の手順は、以下の通りである。

- ①午前9時00分、豊順県から来た一族の者が宗親会のビルの入り口に集合する。列をなして参拝するため、並び始める。
- ②午前9時10分、行進が始まる。写真8にみるように、「楊」の旗と雲岫公の絵を最前列にして並び、太鼓を中間に配置して墓まで行進する。まずは定光古佛の墓の前で待機する。また、雲岫公墓の上に絵と旗を置く。
- ③その間、X地域の年輩男性の指導のもと、女性が供物や線香を定光古佛の墓前に用意し始める。同時に、雲岫公墓前の供物も用意する。墓前に並べる供物は、写真9の通りである。発糕^{ファッガウ}をはじめ、リンゴ、柚子、ナツメ、マスカット、ドラゴンフルーツ、菓子など縁起のいいものを並べる⁸⁾。また、お茶とお酒を入れる器を5つずつ置く。この供物の並べ方は、X地域の張氏や黄氏とも大差ないが、楊氏の場合、定光古佛の墓



写真8 参拝前の隊列 (2014年9月, 筆者撮影)。



写真9 供物を並べる (2014年9月, 筆者撮影)。

前に肉類を並べてはならない。定光古佛は和尚であるため、肉が食べられないからである。雲岫公の墓前には、さらに三牲（魚、豚、鶏）などの肉類を捧げる。

- ④ 9時22分、係りの者（ホスト側）が線香を配り始め、定光古佛の墓前での参拝が始まる。祖先から伝わる「しきたり」に基づき、必ず定光古佛を先に参拝しなければならない。これは、定光古佛が先に風水のよい地を見つけ、その後に雲岫公の遺体を葬った歴史的経緯を再現している。雲岫公とその風水は、定光古佛の加護によって守られている。それゆえ、先に定光古佛を参拝することで、始祖が佛の力を得られるよう先に喚起しておかねばならないのだという。定光古佛の参拝にあたっては、墓から向かって左側に立つ司会が進行し、右に立つ男性が紙に書かれた祭文を読む。その後、掛け声で三回お辞儀をする。一人、菓子を持ち三度のお辞儀をし、次に全体で三回お辞儀をする。祭文を読んでいた者がまず紙銭を燃やし、参拝者が次々と墓前に線香を供えに行く。以下の通り、祭文には、定光古佛が風水のいいところに墓をつくった伝説、それゆえ墓には靈験があり一族が繁栄したことが書かれており、それが儀礼時に客家語で読まれる。こうして、墓をめぐる伝説が記憶され、後世に受け継がれていく。

〈定光古佛の墓の参拝時に読まれる祭文〉

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.



写真10 定光古佛墓前の参拝(2014年9月, 筆者撮影)。



写真11 雲岫公墓前の参拝(2014年9月, 筆者撮影)。

⑤ 9時34分、楊雲岫墓前に全員で移動する。同じ要領で係りの者が線香を配り始め、祖先祭祀が始まる。墓から向かって左側に立つ司会の進行で進み、右に立つ男性が紙に書かれた祭文を読む。祭文を読む者は、一族で徳が高く尊敬されていて、儀礼の知識を豊富にもつ者が選ばれる。その後、司会の掛け声で、参拝者が三回お辞儀をする。そして、一人が、まず三犠をもち、3回拜む。興味深いのは、張氏など他の宗族が三牲の他に羊の丸焼きを捧げるのに対し、楊氏の間では、羊を供物にはならないという禁忌がある。楊と羊が同音なので祖先と何かしらのかわりがあると考えられているからである。トーテミズムと類似する観念がここでは見られる⁹⁾。続いて、菓子を持ち三度のお辞儀をし、茶を入れて三度お辞儀、最後に酒を入れてまた三度お辞儀をする。次に全体で三回お辞儀をする。祭文を読んでいた者がまず紙銭を燃やし、参拝者が次々と墓前に線香を供えに行く。以下のように、祭文の内容は、始祖が梅州にやってきた経緯、及び、三人の息子が科挙に合格し、風水のおかげで一族が繁栄したことが書かれている。同様に、祭文を通して、この墓の重要性が一族の成員に記憶される。

〈始祖の墓の参拝時に読まれる祭文〉

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

⑥9 : 42, 爆竹を鳴らして終了。個別に墓前に行き、頼みごとがあると眩きながら「叩頭」して参拝する。そのまま帰るものもいる。菓子など供物の一部を持って帰る参拝者も少なくない。終了後、将軍亭前に行き集合写真を撮影する。

繰り返すと、2004年からの10年余り、筆者が秋祭りを観察してきた限りでは、儀礼の基本的な手順は変わっていない。特に、宗親会の会館から列をなして出発し、先に定光古佛を参拝してから始祖を参拝する手順、及び、供物にて禁忌や幸福を込めることには変化がみられない¹⁰⁾。グローバル化や都市化が進む現在においても、祖先をめぐる記憶に関する部分は変えてはならないと意識されているからである。また、こうした「無変化」の要因として、墓が存続していることや祭文により祖先の記憶が喚起されていること、すなわちモノの存在が関係していると考えられる。ただし、筆者が観察する限りにおいて、10年間の祖先祭祀活動に全くの変化がなかったわけではない。以下に見る、いくつかの変化を確認することもできた。

第一に、2014年以降、会場に「客家」の二文字を記した貼紙がみられなくなった。このことは、2013年に公園の景観建設がいちおうの完成をみせ、2014年に2つの墓が市の重点保護単位に指定されたことが関係しているのかもしれない。楊氏は、以前ほど客家の言説を強調する必要がなくなり、その代わりに公園を省の重点保護単位とすることを

目指すことを強調している。もちろん先述した定光古佛の石碑には客家の文字が明確に刻まれているし、状元亭と將軍亭は客家言説と軌を一にした景観として存在している。だが、近年では、近年の中国における文化遺産ブームに迎合し〔飯田・河合 2016〕、楊氏の間でも文化遺産をめぐる言説のプレゼンスがますます増している。

第二に、隊列の出発点が変更した。というのも、X地域の楊氏宗親会は、もともと始祖の近くにあったのだが、2013年8月に宗族大樓落成した。したがって、2014年の時点では、古い元の建物ではなく、写真8にみるように、新しい宗族大樓から出発することになった。

第三に、儀礼の供え物が減少する傾向がみられる。X地域の楊氏が口を揃えて語るように、かつての祭祀時に捧げられる供物はもっと盛大であったという。確かに筆者が観察した限りでも、何箱も持ってくるのがあった「紙銭」の量が減り、墓の両サイド一杯に置くことがあった紙製の「官服」の服があまりみられなくなった。さらに、獅子舞による墓の参拝が減少する傾向も見られる。獅子舞はX地域で招くのではなく、各々の「房」で用意する。2014年には、惠東在住の「房」など一部の例外を除くと、上記の豊順県をはじめ大多数が獅子舞をしなかった。しかし、2006年には、写真12にみる五華の成員だけでなく、いくつかの「房」が獅子で墓の周囲を回り、墓の生命力を地元に持ち帰るパフォーマンスをしていた。X地域の楊氏であるG氏によると、獅子舞ができる成員が少なくなったことが、減少の理由だという。

ただし、儀礼の内容や規模の縮小が、宗族による祖先崇拜の減退であると解釈するのは早計である。というのも、楊氏に参拝しに来る子孫は、始祖とつながり、その墓の好風水を享受するという目的そのものを達成しているからである。例えば、2006年に参加しに来たシンガポール在住の中年夫婦は、始祖の墓を参拝した後、供物の飴をとって次のように語った。

「私たちがシンガポールからはるばるやってきたのは、祖先の好風水を享受するためです。雲岫公の墓の風水はとても良いため、一族の人口が増えただけでなく、多くの成功した子孫を輩出しました。この飴は、祖先の運気がつまっています。我々華僑は、こうして祖先の良



写真12 獅子舞を用いた始祖の墓の参拝（2006年9月，筆者撮影）。

い気を持って帰るのです」。

つまり、獅子舞こそしなくても、供物の飴を持ち帰るということで、祖先の運気を分け与えてもらう行為をおこなっている。儀礼のやり方に若干の変化はみられても、儀礼をおこなう目的そのものには変化はみられないのである。

4.2 参拝者とその変化

楊氏の祖先崇拝において最も大きく変化したのは、参拝者数の増加である。秋祭りの例を挙げると、公園建設前には1,000-2,000名規模の参拝者であったが、公園景観を建設した後の2014年には、その数倍に膨れ上がった。楊氏宗族の成員の話では、今まで一度も参拝したことがなかった、見たこともない成員も少なくないという。では、宗族公園に関与する成員の層に具体的などのような変化が生じたのか、秋祭りの参加者数や寄付者一覧の変化から分析してみるとしよう。

まず、表1にみるように、1999年の秋祭りに参加しているのは、圧倒的多数が広東省東部に住む一族である。そのうち最も多いのは地元の梅県であり、その次は、梅県から普寧に移住した「房」の人々である。全体として、梅州市内（梅県・平遥・五華・大埔）の参拝者が占める割合は40%強と、半数に近い。

表1 1999年楊氏秋祭り参加者

梅県	550人余り	紫金	60人余り	大埔	10人余り
普寧	350人余り	陸豊	60人余り	その他	200人余り
龍川	110人余り	海豊	50人余り		
五華	80人余り	揭西	50人余り		
恵陽	60人余り	平遠	10人余り	合計	1,500人余り

出典：『簡報』と石碑を基に筆者作成

他方で、2002年8月刊行の『簡報』創刊号には、数名の寄付者が記載されている。そのうち、台湾に在住する子孫2名は、1999年に寄付をしたことが明記されている。その他にも、香港、インドネシア、タイ、モーリシャス、アメリカ、オーストラリアの一族が寄付していることが記されていることから、公園建設の初期の段階で、すでに少なからずの華僑が参与していることが分かる。

次に、準備期である2008年までの間に、誰が、どれくらい寄付をしたのかについて、表2を見てみることにしよう。

表2 地域／国別寄付額一覧（1999年-2008年6月30日） 単位：元

(梅州)	元≒20円	清遠	5,000	連城	4,300
梅県	609,029	連南	2,760	長汀	1,500
豊順	181,813	海豊	1,400	武平	1,100
興寧	62,188	陸河	2,300	上杭	500
五華	39,080	連平	2,200	龍海	500
平遠	31,657	広州	1,680	廈門	400
蕉嶺	11,740	清新	1,045	福安	200
大埔	7,200	潮州	800	(江西)	
(広東)		英徳	700	遂川	2,800
恵陽	3,078,391	従化	700	萍郷	500
東源	104,550	翁源	480	尋烏	270
普寧	83,908	呉川	200	于都	100
掲西	72,623	掲陽	200	(湖南)	
龍川	68,800	中山	120	[地名不詳]	100
紫金	50,280	茂名	100	(特区)	
恵東	46,180	(広西)		香港	3,065,344
陸豊	32,750	賀州	66,400	(国外)	
連山	22,668	藤県	6,186	シンガポール	114,859
陽山	18,480	桂平	1,500	マレーシア	10,000
恵来	10,600	柳州	1,000	モーリシャス	2,250
東莞	6,500	岑溪	1,000	カナダ	100
惠州	6,100	融安	200	日本	100
佛山	5,600	(福建)			

出典：『簡報』第7期（2008年） *一元未満は四捨五入して計上

楊氏の内部新聞である『簡報』には、寄付者の氏名と金額が記載されているが、地域名と個人名をそれぞれ見ていくと金額が必ずしも一致していない。例えば、表2は『簡報』第7期から抜き出しているが、他の媒体では、恵陽の307万8,391元のうち306万7,844元は、「海外港澳台」に住む成員が寄付したと掲載している。そして、その絶対多数は、恵陽籍である香港在住のA氏が寄付した金額であると考えられる。

このように、表2のうち、「特区」や「国外」の数値には若干の重複がある可能性が捨てきれないが、それを前提とすると、準備期の寄付金のうち、中国国内で最も多いのは、①恵陽、②梅県、③豊順、④東源、⑤普寧となっている。そのうち、海外（香港・澳門・台湾含む）居住者が出資した割合は、それぞれ、①99%、②9%、③19%、④94%、⑤42%となっている（いずれも小数点以下切り捨て）。前節で述べたように、理事に就任した海外在住の一族が多額の寄付をしたことを考えると、準備期における華僑の経済的影響力は決して少なくないことが分かる。ちなみに、日本からの100円の寄付者は筆者である。状元亭の事例がそうであるように、金額としては少数であっても、公園建設の寄付者は楊氏の成員だけに閉じていないことがここから明らかである。

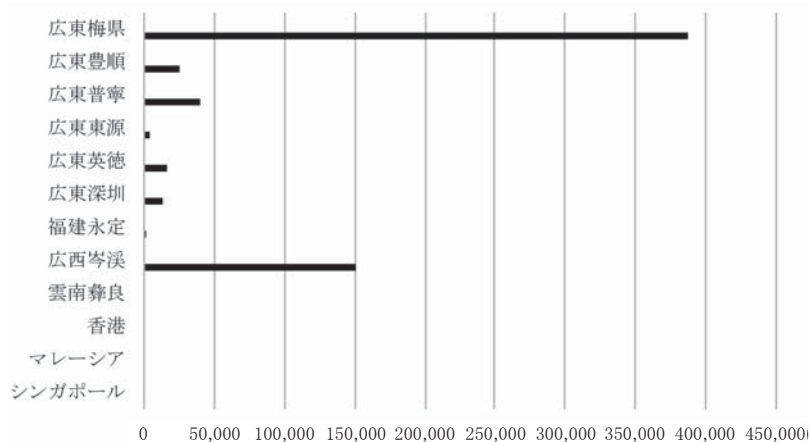
表2からは、もともと広東省東部とそこから海外に移住した華僑が中心であった状況に比べ、徐々に、福建省、江西省、広西チワン族自治区など近隣の省の参与を得られるようになってきていることが読みとれる。そして、建設期に入ると、中国経済の発展に伴い、華僑依存型から中国中心型の寄付へと移行する状況が生まれるようになった。川口 [2016] が珠江デルタの事例で示していた中国-華僑関係の変化が、ここ数年のうちに梅城でも現れるようになったのといえる。

こうした転換は、宗親会の組織にも表れている。準備期、筆者がお世話になった宗親会の会場や理事は、ほぼ全員が退職した高齢者であった。彼らの多くは、海外の会員ともつながりを持ち、その海外ネットワークを利用して広く寄付を集めていた。だが、建設期に入ると、会長や理事は30-40代の若い層に刷新され、彼らは国内の商業ネットワークなどを利用して資金を集め始めた。

2008年7月から2011年6月末までの統計をもとに、寄付金額の増額が国内に偏っていることがよく分かる。また、この期間に新たな投資者も増え、またその範囲は拡大している。『簡報』特刊に掲載されている寄付者一覧を見ると、新たに増えているのは、大亜湾、深圳、饒平、博羅、龍門、和平、従化（以上、広東省）、貴港、合浦（以上、広西）、永定（福建省）、彝良（雲南省）などである。また、金額面でみると、表3にみるように、国内が増加しているのに対して、国外からの寄付は激減している。香港や東南アジア諸国をはじめ、国外からはほとんど寄付がなされていないのである。

他方で、国内の寄付は変わらずなされているが、華僑に寄付を依存していた東源の寄付金額は大幅に数字を落としている。それに対して、大幅な増加を示したのが、広西チワン族自治区の岑溪である。岑溪の子孫は、2008年までには総計1,000元しか寄付をし

表3 寄付金の増加グラフ*単位は元



出典：『簡報』をもとに筆者作成

ていないが、その2013年9月になると15万円にまで数値を伸ばしている。また、英徳もかつての700円から大幅な伸び率をみせている。さらに、金額こそ少ないものの、前述の通り、永定や彝良など新たに公園建設に参加し始めた一族が増えているのも興味深い。

このように国内の参拝者・出資者が増加するなかで、最も注目されるのは、五華の中華楊氏四知文化研究会の参入である。その契機は、2013年7月、この研究会の会長であり深圳で企業を経営するH氏が雲岫公の墓を参拝しに来たことにあった。その2ヶ月後、中華楊氏四知文化研究会五華分会は、各村の楊姓500人を組織して始祖の墓参りに行った。H氏は宗族大樓の建設に100万円を寄付したことを始め、建設期の公園建設で大きな役割を果たすようになった。

こうして宗族公園には、中国南部各地の「新たな」子孫が加わることにより、年々参拝者を増やしている。60歳代のG氏によると、公園建設前、経済的な理由で参拝者も少なかったが、中国が豊かになるにつれ参拝者が増加した。例えば、2014年の秋祭りで最も参拝者が多かった旧暦8月12日には、梅州市内の楊氏を中心に2,000人が参拝した。参拝者は特に2010年から急増し、旧暦8月を通して1万人を超える親族が訪問・参拝していくのだという。X地域の楊氏によれば、参拝する「親族」のなかには公園化計画前に連絡をとっていなかった者も少なくなく、彼らとは公園建設を進めるなかで密に連絡をとるようになったのだという。

それでは、なぜ始祖の墓への参拝者が増えているのであろうか。公園の管理を担当しているI氏（30歳代）によると、今まで見たこともない親戚の参拝が年々増えているが、彼らに特別に招待状などを送ることはしていないのだという。新たな参拝者のなかには、同じ広東省東部の楊氏もいれば、内陸の広西チワン族自治区、さらには海を越えて台湾の楊氏もいる。

X地域の成員や外からの参拝客に「新たな」参拝者が増加した理由を聞くと、その背景には、中国経済の向上および交通網の発達があることが分かる。それまで族譜を見てルーツ探しをしたくとも、経済的な要因により遠出ができなかったり、交通が不便なので躊躇したりしていたというのである。それが近年になり移動が容易になったことで、始祖の墓を訪ねてみようとする人々も増えた。他方で、多様なメディア・ツールにより宣伝できるようになったことも関係している。前述のように、楊氏は公園建設を中心に一族の近況を伝える『簡報』を毎年刊行している他、雲岫公につながる楊氏の族譜を再編纂した。彼らは、雲岫公を越えた楊氏の集会有る時など、機会をみては『簡報』や族譜を配布したり宣伝したりしている。さらに、楊氏は、宗族公園のホームページを作成してウェブ上で公開し、遠く離れた子孫であっても雲岫公の墓を位置が分かるようにした。2014年に墓が市の文物保護単位に指定されると、その相乗効果もあり、雲岫公と定光古佛の墓の存在がますます知られるようになった。

こうした背景により、始祖の墓の存在を知り、そこを訪れようとする楊氏の人々が増



写真13 屏東県冬佳郷の楊氏宗祠 [左]、及び宗祠内部の祖堂 [右] (2016年11月、筆者撮影)。祖堂の中央には雲岫公の位牌が、右側には定光古佛の位牌が並べられている。

加するようになっている。例えば、普寧市のある楊氏は、雲岫公の墓を参拝したことがなかったが、同市の他の楊氏から話を聞き、『簡報』を見せてもらうにつれ、彼らの始祖の墓を参拝しようという動きになった。他方で、台湾南部の屏東県冬佳郷の楊氏は、雲岫公の子孫であると族譜に記載されており、雲岫公と定光古佛を祀る宗祠があるが(写真13)、梅県X地域の墓に参拝することはほとんどなかった。ところが、2011年に宗祠を修築した時に刊行した『楊氏宗祠風華再現』で、雲岫公と定光古佛の墓の写真が掲載されたため、多くの一族がこれらの墓の存在を知ることとなった。それ以降、個々人で梅県までルーツ探しに行く成員が増えたのだという。ただし、冬佳郷の楊氏であるH氏によると、雲岫公の宗祠には異なる系統の楊氏が属しており、雲岫公は血縁上の祖先というよりは、地元の楊氏を統合するシンボルのようなものである¹¹⁾。

繰り返すと、再編纂された楊氏の族譜、ならびに將軍亭などの記載には、雲岫公との血縁関係が必ずしも明確ではない楊姓の人々が含まれている。したがって、新たに参拝に来る楊姓の人々が、果たしてみな雲岫公の直接の子孫であるのか疑わしい部分も存在する。だが、X地域の楊氏にとって重要なのは、雲岫公との血縁関係ではなく、雲岫公を宗族のシンボルとし、墓とその風水を共有する人々なのである。楊氏にとって、後者も「親族」と呼びうる成員なのであり、彼らは墓という物的存在を通して再構築されている。

5 おわりに

以上の事例から、宗族公園は、政策的意図によりトップダウン的に建設されてきたわけではないことが分かる。むしろ楊氏は、中原や寧化石壁からの移住の歴史ではなく、始祖である雲岫公にまつわる歴史記憶を重視し、雲岫公と定光古佛の墓を守ることを最大の任務としてきた。そのために、彼らは、墓の祭礼や定光古佛を客家の特色と結びつけ、状元亭や將軍亭などを建設して客家イデオロギーを表に出すことで、政策的と足並

みを合わせる工夫をなしてきたのである。楊氏が公園化計画を推進する契機は、一族の歴史記憶とかかわり、繁栄を「保障」する墓の風水を守ることにあった。だから、時代に合わせて多少の変化こそしても、楊氏にとって核心部分である墓をめぐる歴史記憶と「しきたり」だけは継承させてきたのである。換言すれば、政策的な要求に合わせて客家言説を領有することにより、祖先から伝わる歴史記憶や「しきたり」を存続させる土台をつくりだしてきたのである。

近年、人文—社会科学では〈場所 (place)〉をめぐる議論が注目を集めている [Feld and Basso (eds.) 1996; Giesecking and Mangold (eds.) 2014; Cresswell 2015]。〈場所〉の概念は分野や個人によりさまざまであるが、一般的に人類学では、歴史記憶、社会関係、アイデンティティが埋め込まれた社会空間であると定義される [オジェ 2002: 244, 245; 河合 2013: 30]。さらに、〈場所〉は、モノ＝物的環境との相互関係により形成される社会空間でもある [河合 (編) 2016]。こうした視点からすると、雲岫公や定光古佛を中心とする社会空間は、始祖をめぐる歴史記憶、楊氏の「親族」ネットワーク、楊氏としてのアイデンティティが埋め込まれている〈場所〉であるといえるであろう。

これまで都市空間をめぐる社会科学の諸研究では、しばしば都市開発により〈場所〉が消失し、資本の論理に適合した〈空間〉が新たに生産される過程が論じられてきた。例えば、地理学者であるデヴィッド・ハーヴェイは、「創造的破壊」の概念を使い、祖先から受け継がれてきた〈場所〉は一旦「まっさら」にされ、その後、資本の論理に適合する新たな伝統が〈空間〉の特色として生産されるのだと指摘した [Harvey 1990]。確かに梅県における都市開発では、円形土楼や三山国王など、観光客や投資者の関心を引く新たな伝統文化＝客家文化が重視されている。そのなかで、古くから伝わる民俗や物質文化が失われているのも事実である。だが他方で、楊氏公園のように、祖先から伝わる〈場所〉の意味を継承し、それどころか〈空間〉のイデオロギーに足並みを揃えることで、〈場所〉を強化する動きがあることも注目に値する [Feuchtwang 2004]。

それでは、なぜ都市開発の進む梅県において〈場所〉がむしろ強化される動きがみられるのか。その要因として、まず挙げねばならないのは、墓や祭文など物質文化が残されていることである。かつてI氏は、「あそこに『石』があることが何よりも重要である」と筆者に語ったことがある。石とは、始祖と定光古佛のことである。つまり、墓があるから人々はそこに集まるのであるし、墓を共有することが「親族」としてつながる結節点となっている。また、儀礼時に成員が祭文を読むことで聴覚を通して歴史記憶が喚起される。一般的に知られる中原や寧化石壁とは異なる歴史記憶は、こうした行為を通して、一族の結束を強める資源となる。そして、こうした資源は、物体として、つまり景観として視覚的に表されるようになり、それを遺産として守ろうとする動きが、結果的に〈場所〉の強化を促すのである。

注

- 1) 興寧は県級市であるため、梅州市の管轄に入っている。また、蕉嶺県もまもなく県級市に認定されることになっている。近年、蕉嶺県は「長寿の郷」の看板を掲げ、健康や療養を資源とする都市開発を急速に進めている。
- 2) この制度は、「回避制度 (the rule of avoidance)」と呼ばれる。ちなみに、楊略には9人の息子がおり、長男の楊鋭と次男の楊鋌は地元に残ったが、五男の楊雲岫を含む7名の息子は他の県や省に移住した。現在、楊略の子孫は、江西省や広東省だけでなく、福建省、湖南省、湖北省、四川省、広西チワン族自治区などに移住しているが、その子孫たちが客家を名乗っているかどうかは興味深い問題である。
- 3) 2016年11月までに台湾の美濃に数回調査に出かけたが、現地では、楊雲岫の系譜の子孫に関する情報を得ることができなかった。他方で、同じ南部の屏東では楊雲岫の系譜にあたる関西堂の楊氏がいる。冬佳郷には楊氏の祠堂があり、楊雲岫と定光古佛が祀られている。また、中部の東勢にも楊雲岫の子孫の祠堂があるという。梅県で入手した『楊氏族譜』では、美濃と宜蘭の子孫しか掲載されていないが、実際には台湾にはより多くの子孫がいると考えられる。
- 4) 社会主義を掲げる中国の土地制度では、都市の土地は国家所有、村落の土地は集団所有と位置づけられるが、物業管理や森林管理などの名目で合意を得られれば、人々は国家から土地を借用して使用することができる。これを中国では「土地転讓」と呼ぶ。
- 5) 『楊氏簡譜—雲岫公世系増訂本』において楊尚昆は、重慶市双江鎮出身の楊氏としか記されていない。一説によると、楊尚昆の祖先は、楊震(楊杼から数えて35代の祖先)や楊承休(楊杼から数えて58代祖先)である。この説を信じるならば、楊尚昆は雲岫公と同じ祖先をもつことになるが、楊尚昆が雲岫公の子孫であるという記載は見当たらない。
- 6) 梅県には、儂智高の乱を迎撃した楊文広とその姉である楊宜娘にまつわる伝説が残されている。梅県では戦死した楊宜娘の墓(仙人婆婆の神壇とも言われる)があり、今でも毎年旧暦7月7日に楊氏の間で参拝がおこなわれるなど、地元の信仰を集めている。このように、地元で著名な楊氏の人物が何かしらの形で雲岫公と結びつけられ、墓への権威づけがなされているものと考えられる。
- 7) 彰化県の定光古佛廟は1761年、淡水の鄞山寺は1823年に建てられた。後者については、写真5の位牌にみるように、福建省永定県からの移民によりもたらされている。
- 8) リンゴ(苹果)は、「苹」と「平」が同じ読みのため、「平安」を意味する。柚子は、客家語で「ユーズ」と読み、「有子」と同じ発音なので「子宝」を意味する。ナツメ(棗)は、「早」と発音が重なるため、「早めの出産」を意味する。また、マスカットは、粒がたくさなることから「豊作」や「子沢山」を、ドラゴンフルーツは燃えているような形状から「火旺=家が栄える」を意味している。他方で、菓子には、「富貴」などの文字が入ったことを選ぶ。このように、何が縁起の良い供物であるかは、音や文字や形状などによって決められている(この点は日本とも似ている)。また、出産など生命観と関連する供物があることも注目に値する。
- 9) 楊氏の祖先祭祀には、羊を供物として捧げてはならない他に、いくつかの禁忌がある。まず、秋祭りは夏の暑い日におこなわれるが、帽子をかぶったり、日傘をさしたりしてはならない。また、参拝中は、墓の後方の盛り上がったところ、特に墓石の後方に立ってはならない。いずれも祖先に失礼にあたる。
- 10) 他方で、2つの墓の参拝には女性に加わることがあるが、これも共産主義の男女平等イデオロギーによって変化した現象ではなく、民国期にも嫁や婚出した女性が参拝することはよくあっ

たのだと聞く。

- 11) 2016年11月、屏東県冬佳郷での調査による。冬佳郷の楊氏については、楊景謀 [2015] の研究に詳しい。H氏によると、最近になり雲岫公の墓を訪れる子孫は増えたが、それより世代が下の祖先のルーツである瑞金市や蕉嶺県との一族との連絡はほとんどない。

参考文献

〈日本語文献〉

飯島典子

2007 『近代客家社会の形成—「他称」と「自称」のはざままで』東京：風響社。

飯田卓・河合洋尚

2016 「序」河合洋尚・飯田卓（編）『中国地域の文化遺産—人類学の視点から』（国立民族学博物館調査報告 136）pp. 1-17, 大阪：国立民族学博物館。

オジェ, マルク

2002 『同時代世界の人類学』森山工訳, 東京：藤原書店。

河合洋尚（編）

2016 『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。

河合洋尚

2007 「客家風水の表象と実践知—広東省梅州市における囲籠屋の事例から」『社会人類学年報』33: 65-94。

2013 『景観人類学の課題—中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

2016 「都市景観をめぐるポリティクス」河合洋尚（編）『景観人類学—身体・政治・マテリアリティ』pp. 195-226, 東京：時潮社。

川口幸大

2016 「僑郷とは何か」川口幸大・稲澤努（編）『僑郷—華僑のふるさとをめぐる表象と実像』pp. 5-19, 大津：行路社。

菊池秀明

1998 『広西移民社会と太平天国』東京：風響社。

瀬川昌久

2016 「あとがき」瀬川昌久・川口幸大（編）『〈宗族〉と中国社会—その変貌と人類学的研究の現在』pp. 295-300, 東京：風響社。

聶莉莉・韓敏・曾士才・西澤治彦（編）

2000 『大地は生きている—中国風水の思想と実践』川崎：てらいんく。

渡邊欣雄

1990 『風水思想と東アジア』京都：人文書院。

2001 『風水の社会人類学—中国とその周辺比較』東京：風響社。

〈英仏語文献〉

Cresswell, Ti

2015 *Place : An Introduction* (second edition). Oxford: Wiley Blackwell.

Feld, Steven and Keith Basso (eds.)

1996 *Senses of Place*. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

Feuchtwang, Stephan (ed.)

2004 *Making Place : State Projects, Globalization and Local Responce in China*. London: UCL Press.

Gieseking, Jen Jack and William Mangold (eds.)

2014 *The Poepole, Place, and Space Reader*. New York and London: Routledge.

Harvey, David

1990 *The Condition of Postmodernity*. Oxford: Blackwell.

Lefebvre, Henri

1974 *La production de l'espace*. Paris: Basil Bachelor.

〈中国語文献〉

羅香林

1992 『客家研究導論』上海：上海文芸出版社（原版1933年）。

梅州市地方誌編委弁公室

1992 『梅州客家風俗』廣州：暨南大学出版社。

梅州市華僑志編輯委員會

2001 『梅州市華僑志』深圳：星光印刷有限公司。

邱立漢

2015 「閩西客家定光古佛信仰及其文化景觀的形成」夏遠鳴・河合洋尚（編）『全球化背景下客家文化景觀的創造』pp. 73-81, 廣州：暨南大学出版社。

彭兆榮

2006 『邊際族群——遠離帝國庇護的客人』合肥：黃山書社。

2008 「帝國邊陲政治地理學對客家文化的影響——以福建寧化客家族群建構為例」『客家研究輯刊』33: 1-9。

楊景謀

2015 「祖蔭興再生——屏東佳冬楊氏宗祠及楊及芹祖堂保存運動之比較研究」（高雄師範大學修士論文）。

周建新

2006 『動蕩的困籠屋——一個客家宗族的城市化遭遇與文化抗爭』北京：中國社會科學出版社。